

伝統文化を主体的に継承する ―人口減少社会での新視点―

愛媛大学地域協働推進機構

准教授 大本 敬久



レッドデータブック的 「祭り調査報告書」

新居浜の太鼓台、西条のだんじり、今治の継ぎ獅子、松山の神輿の鉢合わせ、宇和島の牛鬼・鹿踊りなど、愛媛県内には多様な伝統行事が継承されているが、それぞれの地域に独自の個性を持つ行事が数多く、愛媛を代表する祭りを一つに選ぶことは容易ではない。

祭りなどの伝統文化は、そこに暮らす人びとの心の拠り所として、世代を超えて現在にまで大切に守り伝えられてきた「地域の宝」である。しかし、急速に進んでいる人口減少や少子高齢化に伴う担い手不足、地域行事に対する関心の低下、価値観の多様化により、その継承が危ぶまれる事例も多く見られる。加えて、近年のコロナ禍の影響により、例年通りに祭りを行うことが難しい状況が続いたことで、ますます変容が進んでいる状況となっている。

愛媛県教育委員会(以下「県教委」)ではこうした状況を危惧し、県内の祭り・行事の現状を把握するため、令和3年度から全県的な祭り・行事の実態調査を実施し、令和6年3月に報告書『愛媛県の祭り・行事』が刊行された。調査は県教委



西条市のだんじり 毎年、多くの若者が帰省し参加する。

文化財保護課を事務局として、愛媛県祭り・行事調査検討委員会(委員長・森正康 松山東雲短期大学名誉教授はじめ4名の学識経験者で構成)の指導のもと、専門調査員47名と調査員119名、そして市町文化財保護行政部局の協力を得るという体制で、基礎調査(1673件)、詳細調査(57件)が報告されている。県教委文化財保護課のホームページに全文がPDF公開されており、神楽や獅子舞、念仏踊りなどの郷土芸能については、既に県教委によって調査が実施され、平成11年に『愛媛県の民俗芸能』が刊行されている。地域の伝統文化を知り、そして継承を考える上での「レッドデータブック」としてご参照いただきたい。

伝統文化と地域アイデンティティ

そもそも「伝統文化」とは何か。「文化」の英訳カルチャーの語源はカルチベート(耕す)とされるが、その地域の「空間」を構成する地形、地質、土壌、気候条件、生態系といった自然環境をベースとして、そこに住む人びとや、地



西予市の野村秋祭り 西日本豪雨からの復興のシンボルにもなっている。

域に関係するさまざまな立場の人びとによって、「時間」をかけて、生み出されてきた(継承)もの。筆者はこのように考えており、さらに「伝統文化」を「空間」(x軸)と「時間」(y軸)という座標軸にプロットすることを常にイメージしている。過去・現在・未来という時間軸、そして現住地域・他地域・世間・世界という空間軸に位置づけて整理することができて、地域の個性、価値、

「地域らしさ」を理解することにつながっていく。

また、「伝統文化」は個別、個人の所有物ではない。地域住民にとって「共有の財産」であり、「共有の体験」、「共通の記憶」(思い出)を作り上げてきたものである。これは地域のアイデンティティを醸成するとともに、「この地域に存在する自分」、「他ならぬ唯一の存在である自分」という確信を持つことにもつながっていく。

そして、「伝統文化」は地域を担っていく子どもたちが自分の住む地域の成り立ちや個性や課題を知るためだけでなく、豊かな人間性を育むための良質な教材ともなってきた。「伝統文化」から地域らしさを理解することに加えて、地域の課題解決や地域づくり、人づくりにもつながり、地域の魅力や豊かさ、幸せ度(ウェルビーイング)の向上にもつながっていく。そんな可能性を秘めていることは強調しておきたい。

伝統文化を活かした二地域居住

近年、「二地域居住」というキーワードをよく耳にするようになった。「二地域居住」とは、都市部の住民が多様なライフスタイルを実現するための手段とし



八幡浜市の川名津神楽 地元小学校での総合学習を活かした後継者育成が続く。

て、都市での住居や生活拠点を持ちながら、農山漁村部の同一地域において中長期的、定期・反復的に滞在することにより、地域社会と一定の関係を築くことである。かつては「半定住」とも呼ばれ、定年後の「週末田舎暮らし」、「別荘暮らし」といったイメージが強く、都市住民側からの視点でとらえられていた。

しかし、近年のコロナ禍による意識変化で地方暮らしへの関心が高まっていることや、テレワーク、兼業・副業等の就業環境の変化によって、都市住民が多様なライフスタイル実現のための重要かつ身近な手段となりつつあり、人口減少の進む農山漁村部にとっては、地域内の消費や住宅などの需要を増加させ、新しい雇用を生み出し、地域社会を創出、再構築し、さらには「定住人口」の増加に繋がることも期待されている。

都市部の若者が年に一度、故郷に帰省

して祭りに参加し、故郷と関係性を持ち続けることも広義の「二地域居住」といえる。これはまったく新しい現象ではなく、愛媛県内でも西条まつり、新居浜太鼓祭りをはじめとして、盆正月に加えて祭礼日にも帰省して祭りの担い手として参加し、地域に貢献するという事例は多い。現在、国土交通省を中心に「二地域



松山市北条地区の亥の子 小中学生が主体的に行い地域の教育力を高めている。

居住」の推進に向けて施策が講じられているが、祭りなどの行事に参加して地域貢献をすることも、今後、支援の対象となる可能性もあるだろう。国の施策として、そして地域が主体となり、祭りなど伝統文化という地域資源を活かして「二地域居住者」を増加させる魅力化を進めていく。今後、人口減少が進行する地域社会の持続性を確保する一手段として「二地域居住」について議論を深めていくことも重要となってくるだろう。

将来に向けて伝統を構築する

「伝統文化」は固定化されて継承されるものではない。祭りや年中行事には生活を安心・安全に保ち、地域を豊かにするといった先祖からの願いや思いが込められている。今を生きる私たちは、無自覚に「伝統だから守る」という姿勢ではなく、先人が伝えてきた思いが何なのかを理解し、同時に現代にふさわしい行事を、いかに自ら考え、判断し、創出していくのかが重要な視点となってくる。過去からの固定的な継承ではなく、未来に向けてどのように継承するかをそれぞれの時代、世代で考えて実行していく。これが今後の伝統文化の保護、活用へのスタンスなのかもしれない。



宇和島市津島町野井の亥の子 少子化により代わりに「おやじ連中」が行っている。

継いできた負の側面もあることを忘れてはならない。祭りは村社会の男性論理で構築されたものが多く、地域の男性から「異質」とされた女性、よそ者、外国人排除など排他性をはらんでおり、それらも一緒に継承されている。新しい時代の伝統文化、そして地域社会をどのように構築するのか、時代に即して担い手、関係者が「主体的」に考えて新時代へ伝統文化を渡していく視点も必要だろう。